



## 教育実践研究フォーラム in 長崎大学 (2022年11月19日開催)



本年度のフォーラムは、新型コロナウイルス感染症の流行に伴う新しい生活様式に対応し、オンラインと対面のハイブリッド形式での開催とした。テーマを「学校・学級を問い直すー未来をつくる子どもたちのためにー」とし、午前と午後のプログラムに分けて実施した。午前の部では、大学院生が29件、附属学校教員が9件、大学教員と附属学校教員との共同研究で8件、計46件の実践研究を20分ずつ8ブースに分かれて発表し、各ブースでは発表に対して様々な観点からの質疑応答が展開されていた。各研究のさらなる深化・発展等につながることを期待したい。午後はテーマに基づき、「子どもたちの『発達の危機』と学級・学校づくりの課題」について、まず北九州市立大学の楠凡之氏から基調講演をいただき、その後教育行政担当者、附属学校教員、大学教員の4名のシンポジストによるパネルディスカッションを実施した。本会が今後の教育の振興の一助になれば幸いである。ハイブリッド形式での開催にも関わらず、多くの方に参加・協力をいただいたことに衷心より謝意を表したい。

### 【プログラム】

- 1 テーマ:学校・学級を問い直すー未来をつくる子どもたちのためにー
- 2 日程

〈午前の部〉 9:30 ~ 11:55 研究発表 46件

開会あいさつ 藤本 登 研究科長

発表1... 発表24件

発表2... 発表22件

〈午後の部〉 13:00 ~ 16:45 シンポジウム(基調講演・パネルディスカッション)

(1)基調講演:北九州市立大学文学部 教授 楠 凡之 氏

講演題目:子どもたちの「発達の危機」と学級・学校づくりの課題

(2)パネルディスカッション

コーディネーター	長崎大学大学院教育学研究科	教授 林田 和喜 氏
基調講演者	北九州市立大学文学部	教授 楠 凡之 氏
シンポジスト	長崎県教育庁児童生徒支援課	課長 大川 周一 氏
"	長崎市教育研究所	所長 山本 高靖 氏
"	長崎大学教育学部附属小学校	教頭 橋本 晶拓 氏
"	長崎大学大学院教育学研究科	教授 吉田 ゆり 氏
閉会あいさつ	星野 由雅 副学部長	

### 実践研究 発表



#### 子ども理解・特別支援教育実践コース 横山 優子

発表1・2共に特別支援教育にかかわるブースに参加させていただいた。様々な切り口からの児童生徒の理解と支援に関する実践や特別支援教育にかかわる教師の専門性を高めるための取組を拝見し、改めてその推進の重要性を感じた。スマートデバイスの活用、ポジティブ行動支援、特性を持つ児童への支援や配慮を要する児童の人間関係づくり、アセスメントスキル養成など、学校現場で必要とされる大変興味深い内容ばかりだった。フォーラムのテーマ「学校・学級を問い直す」は自分自身のテーマでもある。今までの教職人生を立ち止まって問い直している今年度、フォーラムを通して更に新たな視点を得て学びを深める時間となった。

#### 学級経営・授業実践開発コース 松尾 朋恵

私が参加したブースでは、大学院生・大学教員・附属学校園の先生方が、音楽・家庭・体育・道徳の実践研究について発表されていた。これまで私は上記の教科についてあまり触れることがなかったのが、新しい知識や視点を獲得できた。私事ではあるが、小学校教員になる以上、自分の専門の教科だけではなく、他の教科の研究にも触れることができる機会をいただき大変有意義な時間であった。発表者・参加者はそれぞれの立場からの意見を交わしており、深まりがあったように思う。発表を通して研究を行う上での客観性や重要な視点などを得ることができた。今日の学びを今後の自分の研究や授業実践、学校現場に活かしていきたい。

#### 教科授業実践コース 平石 直樹

「いざ現場で実践して、初めて見えていなかった課題に直面した」というような発表をいくつも聞いた。「知らなかった課題」というものは恐ろしいものである。発表を通して、実践しなければ見えないことのない新鮮な課題こそ、教師として、あるいは学校として解決すべき本質に価値のある課題であると感じた。それを様々な立場に向けて共有することができ、フラットに議論ができる実践研究フォーラムに改めて意義深さを感じた。このフォーラムを通して、実践することの大切さを痛感するとともに、見えていなかった課題を見つげようとする感覚が鋭くなったと思う。日々の実践の向き合い方が大きく変わった日になった。

#### 教科授業実践コース 大塚 寛子

午前の発表では、各ブースに分かれてZOOMを使ったスライド発表を行った。発表用のスライドと原稿作成時には、根拠を明らかにすること、無駄な情報を省いて簡潔な言葉や伝えたい項目に絞った表を提示することを意識した。また、実習4・5での見取り・聞き取りや実習校で提案した手立てなどの事実を報告することに心がけた。発表後、現場の先生に貢献したいという研究に対する自身の思いと具体的な手立ての内容について助言と質問をいただいた。どちらも伝えたいと思い準備したので、それらを理解していただけたことは大変うれしかったが、限られた発表時間の中で聞き手に伝えるには、伝えたいことをさらに絞り、その部分を具体的に話すなど、自分が思う以上にめりはりが必要であると感じた。

#### 管理職養成コース 徳永 由美子

大学院は様々な立場で学ぶ学生の集合体である。各自の興味・関心、そして問題意識のもとに研究に取り組んでいる。その研究を広げたり深めたりしてくださる教授陣の専門性は多岐にわたり、新たな知識や視点が得られる。その学びの発表の場として設定されたフォーラム。発表の場があることで、自分の研究の目的や方向性が再確認できる。さらには、様々な視座からの研究報告により、学校現場の課題が浮き彫りとなり、研究への提案や学ぶべきものが明確化された。また、このフォーラムは学生が中心となって企画・運営を行っている。ストレートマスターと現職教員がチームを組んで、ミドル・アップダウン・マネジメントを実体験できる貴重な場であることも申し添えたい。

### シンポジウムの 概要



本年度は、オンラインと対面のハイブリッド形式での基調講演・パネルディスカッションを実施した。基調講演は、北九州市立大学文学部・教授の楠凡之氏による「子どもたちの『発達の危機』と学級・学校づくりの課題について」という題目で行われた。今日の子どもたちの発達の危機は人間的な成長・発達に必要な神経生理学的基盤の危機、アタッチメントの危機、自己肯定感の危機など、多面的な形で生じているとし、講演では事例を挙げながら問題提起がなされた。

パネルディスカッションでは、長崎大学大学院教育学研究科、林田和喜教授をコーディネーターとして、4名のシンポジストが、それぞれの立場で現状や具体的な取組、今後の課題や思いを述べ合った。教育行政担当者の発表では、子どもの不登校に関する現状報告があった。附属学校教員の発表では、学校現場の状況や課題が具体例をもとに示された。大学教員の発表では、個に応じた取組の一つとして大学で行われている支援ラボの活動実践紹介があった。その後、基調講演者とシンポジスト同士の意見交換と、参加者からの質疑に対する応答があった。基調講演者、シンポジストそれぞれの立場から多面的に「不登校と発達障害」について議論を深め、新鮮で有意義な意見交換を行うことができた。

#### 子ども理解・特別支援教育実践コース 吉井 真央

今回のシンポジウムを通して、子どもたち一人ひとりを見つめる大切さを改めて感じた。現在、子どもたちを取り巻く環境は複雑でさまざまな課題がある。一人ひとりの背景や価値観等の情報を持つておくことは、子どもたちの悩みに気づくことや適切な支援につながっていくと考える。また子どもたちが生きづらさを感じた際に、他者に援助要請できる力を育むこと、子どもたちがヘルプを出せる信頼できる場所であることも学校の大切な役割であると感じた。子どもたちが日常の多くの時間を過ごす場所だからこそ、学校は信頼と安心を与える場所であるべきである。将来教師として働く際に今回の学びを生かし、一人ひとりと信頼関係を築いていきたい。

#### 学級経営・授業実践開発コース 藤田 健志郎

「あなたなら大丈夫」「あなたはそういう子じゃない」と一言は、子どもたちの本当の自我状態を抑え込み、「良い子の自我状態」に押し込められていないだろうか。ありのままの自分を表現できる場がなかったり、受容される関係を持たなかったりすると、問題行動によって生きづらさを表現せざるを得ない状況に追い詰められることがある。生きづらさを、自他への攻撃ではなく「つながる力」に変換していく学級経営が求められているのだと思う。子どもたちの存在や等身大の姿、事実の背景にあるものを見ようとする、受け止めようとする、そして「この先生なら受け止めてくれる」とそんな安心感を与える存在になりたいと思った。

#### 管理職養成コース 徳永 貴憲

午後のシンポジウムの基調講演ではコロナ禍がもたらす子どもの発達の危機や、幼少期における親の虐待がいじめ問題に影響していた事例などが数多く紹介された。パネルディスカッションは、5名のシンポジストがそれぞれの立場で、不登校の現状、改善への取組や発達障害について発表し、参加者も交えて活発な議論がなされ、私自身も充実した学びが得られた。不登校生徒を増やさないために、教職員は子どもの悩みや不安の早期把握と対応、相談やコーチングのスキル向上、人間関係形成や居場所づくり、インクルーシブ教育の充実などやるべき事は多いが、私たち教員の果たすべき使命と捉え、今回の学びを子どもたちに還元できるよう、今後も前向きに学び続けたい。

#### 学級経営・授業実践開発コース 岡田 泰知

学校は何のためにあるのだろうか。「不登校は、子どもたちの学び方の多様化」という表現にもあったように、現在子どもたちは学校以外にも学ぶ場を選択できるようになった。そのような中で、今回のシンポジウムは学校の存在意義を問い直すきっかけになった。不登校の児童生徒数が増加したことは、学校での問題、困りごとが増加したのではなく、これまで隠れていた困りごとが露わになったということなのだと思う。また、学ぶ場だけではなく学級に在籍する子どもたちも多様化している。そのような子どもたちを受け入れていくために、目に見えるものばかりにとらわれず、その行動に至った背景や心理にも考えを巡らせ、自分の言動を見直すようにしていきたい。

#### 教科授業実践コース 出口 大樹

「児童虐待の定義に該当する体験をしている子どもは2割以上に達する。」この講演を通して最も衝撃を受けたことである。教員として何かしらサインを見つけてあげようとするが、それ以前に目の前にいる子ども5人に1人は虐待を受けている恐れがあるということを知り、「生きづらさを抱える子」や「大人の思い描く『良い子』に縛られる子」が多く存在することを念頭に置いた教育活動をすべきであるといった新たな視点を獲得することができた。「孤育て」という言葉が連られる程、育児の孤立化というものに進みつつある世の中であるが、このコロナ禍はより育児の孤立化を進行させている。これから教員となる私はどのような指導力を磨いていけばか学び続けていきたい。

#### 管理職養成コース 吉村 裕雄

午後のシンポジウムは、これからの学校の在り様を考える機会となった。わが長崎県も不登校の児童・生徒が増え、フリースクールなどが誕生している。学校に行かなくても、学ぶ場所があり、家庭でも自分で学習することができるようになった今日、学校の存在価値、ミッションは何なのだろうか。私は、「学校は、周りの人々との関わりの中で、子どもたちを成長させる場所だ」と考える。子どもたちは、友達、先輩・後輩、先生、地域の人々等、多くの人々と触れ合うことを通じて、自分を見つめたり、人々に関わる楽しさを体感したりする。一人ひとりの子どもたちが、関わる楽しさや学びを味わい、安心して生活できる学校を創りたい。そのようなことを考えさせてくれた午後のシンポジウムであった。